歴史が教えてくれる日本人の生き方

しらこま ひとみ
白駒妃登美　講演資料
株式会社ことほぎ 代表

プロフィール

福岡県福岡市在住、埼玉県出身。

幼い頃より伝記や歴史の本を読み、その登場人物と友だちのように対話することが何よりの楽しみで、「福沢諭吉が大好きだから」という理由で慶応義塾女子高校へ入学、慶應義塾大学経済学部卒業。

大手航空会社に国際線の客室乗務員として、7 年半勤務後に退社、二児の母親となる。母親になり、さらに大病を患った経験から、命を紡ぐことの大切さを実感し、2008 年「結婚コンサルタント　マゼンダ」として福岡を拠点に活動を始める。歴史の話を交えての婚活カウンセリングや婚活セミナーが好評を博し、2009 年より、歴史が苦手な人でも歴史が大好きになってしまう歴史講座を始める。講座では「こんな歴史の先生に出会いたかった」と、涙する参加者が続出。

2011 年 6 月、" 人生に悩んだら「日本史」に聞こう～幸せの種は歴史の中にある " を祥伝社から出版。TV やさまざまなブログ等で取り上げられ、現在 10 刷を数え、ロングセラーとなる。

2012 年 8 月、日本の歴史や文化の素晴らしさを国内外に発信するために、「株式会社ことほぎ」を設立。“和の心” と “洋の洗練された接遇” を結びつけた独自のサービス論をもとに、「出会いが人生を決める」「サービスとは生き方そのもの」という思いを伝える研修を行う。受講者のプロ意識を養い、意欲を向上させる研修・講演が好評を博し、年間に実施する講演、研修は 120 回を超える。

【著書】

“人生に悩んだら「日本史」に聞こう～幸せの種は歴史の中にある”（祥伝社）

“感動する！日本史”（中経出版）

“日本人の知らない日本がある～こころに残る現代史”（KADOKAWA）。

“愛されたい！なら日本史に聞こう”（祥伝社）

歴史が教える日本人の生き方

目の前の環境を受け入れ、感謝し、全力を尽くすうちに、気がつくと予想もしない方向に導かれ、人生の高みに至っていることがある。〝博多の歴女〟として歴史講座を展開している白駒妃登美さんは、それが日本人ならではの天命追求型の生き方だと説く。歴史上の人物が歩いた道のりやご自身の人生体験をもとに、誇るべき日本人の生き方についてお話しいただいた。

結婚コンサルタント・マゼンダスタッフ
白駒妃登美

しらこま・ひとみ――昭和39年埼玉県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、大手航空会社の国際線客室乗務員として7年半勤務。現在は福岡を拠点に結婚コンサルタントとして活動する一方、〝博多の歴女〟として歴史講座を積極的に展開。著書に『人生に悩んだら「日本史」に聞こう』(祥伝社)。

歴史に目覚めさせた『福翁自伝』

それが子供向けの本だったのかどうかは覚えていませんが、私が歴史に興味を抱くきっかけをつくってくれたのは中学生の時に読んだ『福翁自伝』でした。文明開化の時代、文明の本質を探るべく西洋に渡り、独立自尊の精神を日本に伝えた福澤諭吉の生き方に強く惹かれたのです。

子供の頃から偉人の伝記は大好きでたくさん読んでいました。しかし歴史への関心が高まったという意味では『福翁自伝』の影響はやはり大きかったと思います。問題にぶつかると「こんな時、福澤諭吉ならどう考えるだろう」「豊臣秀吉なら、西郷隆盛なら」と時空を超えた先人たちに思いを馳せるようになり、教科書に出てくる歴史上の人物が、血の通った一人の人間として目の前に現れ、私を導

いてくれるように感じたのです。

人物の思いや出来事の背景を知れば知るほど、歴史への興味は深まり、そこに様々なドラマがあることが分かってきました。大学卒業後、大手航空会社の客室乗務員として日本、世界各地を旅するようになった時も、単にその土地の景色や食べ物を楽しむのではなく「ああ、あの人物はこの場所でこんなことを感じていたんだな」と密かに思いを膨らませました。

その後、私は結婚して航空会社を退社し、一主婦として子育てに追われる毎日を過ごしていました。歴史への関心は高かったものの、そんなマニアックなことを話しても誰も喜ばないと思って自分の心の中だけに留めていたのです。

しかし、これも縁だったのでしょう。コピーライターのひすいこたろうさんとの出会いがきっかけで、三年前から、ブログに日本史のエピソードを綴り始めました。やがてそれは一冊の本となり、いまでは〝博多の歴女〟として福岡、東京をはじめいろいろなところで講演をさせていただく機会が増えました。そして幸せなことに、多くの素晴らしい出会いに恵まれ、毎日がとても充実しています。

幸せは条件が決めるものではない

自分でも予想すらしなかった素晴らしい人生の展開。その喜びや充実感は、若い頃に学んでいた欧米流の成功哲学では絶対に味わえなかったものです。

私は高校受験の頃から約三十年間、カーネギーやナポレオン・ヒル、マーフィーといった欧米流の成功哲学を信じて生きてきました。「誰にも負けたくない」との思いでそれを実践し、叶えたい夢は次々に叶っていきました。

これら成功哲学の特徴の一つは、「善・悪」「損・得」「勝ち組・負け組」といった二元論に基づき、いかにしたら人生や仕事の勝者になるかを説いている点にあります。こういう目標達成型の哲学は、受験に合格する、資格を取得するという短期間の目標については確かに有効な手段かもしれません。

しかし、長くこの思考に漬かってしまうと「もっと、もっと」と欲望が際限なく広がり、達成感は得られても安心感や幸福感、心の底からの自尊感情は生まれることがありません。逆に敗北を恐れる気持ちばかりが高まるように思います。少なくとも私はそうでした。

そして、図らずもそれを思い知らされる出来事が四年前に起きました。体に変調を来し検査を受けたところ、子宮頸がんと診断されたのです。私はそれまで、病気とは消極的な人、クヨクヨする人が罹るもので、明るく行動的な自分とは無縁だと本気で考えていました。成功哲学からすれば、大病を患うのは〝負け組〟ということです。私はたまらない敗北感に陥りました。

がんは初期状態でしたし、二か月間の入院生活で手術と放射線治療を受け、完治したと思われました。ところが、二年後の経過観察の時、肺に転移した可能性があると主治医より知らされました。二人の子供もまだ幼く、倒れるわけにはいきません。しかし、「がんに打ち勝たなきゃ」ともがく私の気持ちを逆撫でするかのように、がんは次々に転移していったのです。

今後の治療方針について相談するために病院を訪れた時、主治医はこうおっしゃいました。

「これから先、お子さんの世話をどなたにしてもらうか。まだ体が動くうちに家族で話し合って考えておいたほうがいいですよ」

これといった自覚症状はありませんでしたが、体が動かなくなる日がやがて間違いなく来るというのです。笑顔が取り得だった私が、その日以来塞ぎ込むようになり、笑えなくなったことでさらに自信をなくし、自分は生きている価値がないとすら思いました。

その時、親友が、どん底の私をこう励ましてくれたのです。

「私は妃登美ちゃんが笑顔じゃなくても、どんなに不機嫌でも、生きていてくれるだけで嬉しい」

いま思うと、この一言が人生を変えたと申し上げていいかもしれません。世の中に、一人でもそう思ってくれる人がいることが、いかにありがたいか。その喜びを実感したからです。お金や健康など、幸せに〝条件〟を求めていた私の目を覚まさせ、幸せは条件が決めるものではないと気づかせてくれたのも彼女の一言でした。

天命追求型の生き方 目標達成型の生き方

西洋式の二元論から離れて周囲

秀吉は侍になるのを夢見て
信長に仕えていた

を見渡すと、何気ない日常生活の中に幸せが満ち溢れていると気づきました。私を応援してくれる家族や仲間がいること、日々食事をいただけること、その一つひとつが喜びであり、感謝でした。「たとえ病気が治らなくても幸せ」と感じた段階で、笑顔を取り戻すことができたばかりか、病気に打ち勝とうという気持ちもなくなり、がんに「おはよう」と声を掛ける余裕すら生まれていました。

そして――。主治医の言葉に衝撃を受け塞ぎ込んだ日から三週間後、これからいよいよ抗がん剤治療という直前、驚くような出来事がありました。事前の検査ですべてのがん細胞が消えていたのです。なぜなのか分かりません。ただ二元論から解放された時期と同じだったのが自分でも不思議でした。

この時、発病前に読んだ話を思い出しました。人間の生き方には西洋の成功哲学に代表される「目標達成型」とは別に「天命追求型」があるというのです。天命追求型とは将来の目標に縛られることなく、自分の周囲の人の笑顔を何よりも優先しながら、いま、自分の置かれた環境でベストを尽くす。それを続けていくと、天命に運ばれ、いつしか自分では予想もしなかった高みに到達するという考え方です。そこでは、自分の夢だけを叶えるfor meより、周囲に喜びや笑顔を与えるfor youの精神、つまり志が優先されます。

私は天命追求型、目標達成型という視点で歴史を捉えたことはありませんでしたが、これからお話しするように、天命追求型はまさに日本人が歴史の中で培った素晴らしい生き方であることに、闘病を通してようやく気づいたのです。

豊臣秀吉の人生目標は天下統一だったのか

天命追求型に生きた歴史上の人物といえば、豊臣秀吉はその好例でしょう。

秀吉は徳川家康、織田信長と比べて大きく違う点があります。家康や信長が殿様を父に持つのに対し、秀吉は農家に生まれたことです。農民の子の秀吉が最初から天下統一を夢見たでしょうか。通説によると、秀吉は「侍になるために織田家の門を叩いた」ということになっていますから、おそらく若き日の秀吉は、天下を取るなど考えてもいなかったに違いありません。しかし、秀吉の人生はその夢を遙かに超えてしまうのです。

ご存じのとおり、秀吉は最初、信長に〝小者〟という雑用係の立場で仕えました。雑用係は、もちろん侍の身分ではありません。けれども、信長が秀吉を雇い入れた時、きっと秀吉は、農民の自分に目をかけてもらえたことに胸を躍らせ、心から感謝したのではないでしょうか。だからこそ、たとえ雑用係の仕事にも自分でできる工夫を施したのだと思います。寒い日の朝、信長の草履を懐に入れて温めてから出した話は有名ですが、草履一つ出すにも喜んでもらえるようアイデアを加えたのです。

やがて足軽となってからも信長を喜ばせたいという思いは変わらず、一層の信頼を得て侍に、さらに侍大将、近江国・長浜城の城持ち大名へと登り詰めるのです。

私のことを振り返ると、目標達成に突っ走っていた時は、確かに夢は叶いました。受験勉強、就職活動、子育て、すべてにビジョンを描き目標を立ててやってきました。しかし、見方を変えれば夢しか叶わなかったのです。夢を超えた現実はやってきませんでした。

では、秀吉はなぜ夢を超えることができたのでしょうか。想像するに、秀吉は最初から天下取りなど考えず、いつも〝いま、ここ〟に全力投球する生き方を貫いたからだと思います。自分の身の回りの人たちに喜んでもらえることを精一杯やっていった。その結果、周囲の応援を得て次々と人生の扉が開き、天下人へと運ばれていったのではないでしょうか。まさに天命追求型の人生だったのです。

酒屋の婿養子が日本初の実測地図を作製

もう一人、伊能忠敬の例をみてみましょう。

忠敬といえば実測地図の作製者として有名ですが、もともとは下総国（千葉県）の造り酒屋の婿養子で、大好きな天体観測の道に入ったのは五十歳を過ぎてからです。

50歳をすぎて天体観測の道を歩み始めた忠敬

人生五十年といわれた時代に平均寿命を過ぎて新しい夢を追いかけるわけですから、相当の決断だったことは確かです。

長男に家督を譲り隠居の身となった忠敬は江戸に出て、浅草の天文方暦局（星を観測して暦をつくる役所）に入り、当時天文学の第一人者と仰がれた高橋至時に弟子入りします。

ところで、忠敬は最初から地図をつくろうと考えていたわけではありません。忠敬が知りたかったのは地球の大きさでした。では、どのようにして測るのか。北極星はほぼ真北にあって動かない。距離の離れた二つの地点で北極星の高さを観測し、見上げる角度を比較することで緯度の差が分かる。二地点間の距離が分かれば球体である地球の外周が割り出せる。そう忠敬は考えました。

忠敬が二つの観測地点として選んだのが、江戸、そして遙か遠方の蝦夷地です。蝦夷地へ行くには幕府の許可が必要になりますが、天体観測と説明しても許しは下りません。そこで思いついたのが「地図づくり」の名目でした。当時、蝦夷地周辺は外国船が出没していましたが、幕府は国防に必要な地図を持ち合わせていませんでした。ですから、忠敬の要請は渡りに船だったに違いありません。

幕府は計画を許可し二十両、現在のお金で百六十万円ほどを援助しました。しかし、測量隊を組織して蝦夷地に行くには到底足りるはずもなく、忠敬は三十年間、コツコツと蓄えた私財をはたきながら蝦夷地に向かうのです。出立前、忠敬は「隠居の慰みとは申しながら、後世の参考となるべき地図をつくりたい」と語っています。後世の人たちに対するfor youの精神であり、志です。

こうして始まった測量ですが、その当時は測量器などありません。人の足と方位磁石を頼りに海岸線を描くという気の遠くなる作業を繰り返さなくてはなりませんでした。記録には「測量隊はいかなる難所もお通りなされ候」とあり、肉体的限界を超え、なお測量に汗する忠敬の苦労が窺えるようです。

測量を終え江戸に帰ったのは三年後。そこで忠敬は本来の目的だった地球の大きさの計算に取りかかります。至時が入手していたオランダの最新天文学書と計測数字が一致していたと分かった時、忠敬と至時は手を取り合い喜んだといいます。さらに驚くことに、忠敬が導き出した地球の外周と、現在GPSとスーパーコンピュータで計算した外周の誤差は、僅か〇・一パーセント以下。私はそこに高い技術力と精神力を備えた日本人のDNAを見る思いがします。

忠敬の実測地図の精密さに驚いた幕府は、六十歳を過ぎた忠敬に、西日本を含めた日本全土の地図を作製するよう命じます。そして忠敬は老骨に鞭打ちながら七十一歳までこの仕事を続け、歴史に名を留める人物となります。

酒屋の婿養子時代、自分が将来日本地図をつくることになるなどと考えるはずもありません。忠敬がやったのは自分の立場で全力を尽くすことだけです。忠敬もまた天体観測という夢を遙かに超え、日本地図作製の国家プロジェクトに挑むという天命に運ばれた一人だったのではないでしょうか。

国を占拠した日本になぜ感謝するのですか

歴史を学んでいると数多くの素晴らしい発見があり、日本や日本人に対する誇りを再認識することが少なくありません。しかし、私自身、最初から日本の素晴らしさを感じていたかといえば、そうではなかったのです。

私もまた戦後教育の中で、アジア諸国に対する日本の行為について教わり「自分たちの祖父、曾祖父たちはなんと酷いことをしたんだろう。これではアジアの人たちに顔向けできない」と、ずっとそう思っていました。

その呪縛から解かれる一つのきっかけとなったのは、航空会社を退社して後、経団連の社会貢献事業部の外部スタッフとして活動していた時の出来事でした。ある大手製鉄会社にインドネシアの二人の大学教授をご案内している時、次のように話しかけられたのです。

「私たちは日本を尊敬していて、とても感謝しています。これが全インドネシア人の気持ちです」

驚いた私は、思わず聞き返しました。

「でも大東亜戦争の間は日本人がインドネシアを占拠していたわけですよね。なのにどうして日本人に感謝するのですか」

教授はしばらく沈黙し、母国の歴史について話し始めました。

「日本軍が来る前、インドネシアは約三百五十年の長きにわたって、オランダの支配を受けていました。欧米の植民地支配には共通点があります。本国の繁栄のみを願い、植民地国の人々を安くこき使って教育の機会を奪うのです。ところが、オランダを追い払った日本は最初に何をしたと思いますか。学校をつくったのです。そして植民地支配に慣らされていたインドネシア人に、民族独立の大切さを教えたのです」

言葉はさらに熱を帯びます。

「日本が撤退してオランダ軍が再びやってきた時、我われインドネシア人は、日本人から教えられたように、オランダに対して敢然と独立戦争を挑みました。我われが手にしたのは、日本軍が残していってくれた武器でした。しかも、独立の大切さを説き続けてくれた日本人の中には、インドネシアに残って我われとともに戦い、自ら先頭に立って戦場で死んでいった人もいます。私たちがいまあるのは日本のおかげなのです」

感動的なお話でした。それでも自虐史観に染まっていた私は「しかし植民地支配そのものがよくない」と反論したのです。

すると教授は、「では、日本が植民地支配をしていた韓国と台湾はいまどうなっていますか。どちらも先進国じゃないですか。欧米が支配した植民地のどこが先進国になったというのですか?」と語気を強めておっしゃいました。

この答えを聞いた時、「そうか」と腑に落ちるのが自分で分かりました。自虐史観が払拭され、日本人として誇りを回復できたのはこの出会いからでした。

もちろん、私は日本の行為を百パーセント肯定するつもりはありません。しかし、すべての出来事には光と影があり、これまであまりに歴史の影の部分だけが強調されてきたように感じるのです。光に焦点を当てることは、日本が未来に向けて前進する上でとても大切だと強く思います。

日本人の根底にある「おかげさま」の精神

最初に申し上げたように、西洋には善悪、損得、勝ち負けという二元論の価値観が根付いています。しかし、長く歴史を学ぶ中で、日本人は損得の〝得〟ではなく、道徳の〝徳〟を生き方の中心に置いていると感じるようになりました。東日本大震災の被災地の方々の冷静な行為が外国人の胸を打ったのは、まさに日本人が育んできた徳によるものにほかなりません。

フランスの詩人で外交官でもあったポール・クローデルは、「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ生き残ってほしい民族を挙げるとしたら、それは日本人だ」という言葉を残しています。第二次世界大戦中、それも敵国・日本を称賛する言葉であることを思うと、驚くほかありません。しかも、貧しくて高貴という相反する要素を包含する発想は、二元論からは生まれることがないのです。

戦後、日本が経済復興するに当たり、西洋的二元論を取り入れることは確かに必要だったでしょう。しかし、豊かさを謳歌する現在、もう一度、本来の日本人の生き方に目を向け、それを取り戻すことはとても重要だと感じています。

物事の原因と結果を分析し、それに対する自己責任を求めるのが西洋的発想とするならば、原因と結果を結ぶ縁、絆というものを大切にし、それに感謝して生きるのが日本的発想です。それは、一言で「おかげさま」という言葉で言い表すことができます。

東日本大震災のような災害や戦禍は、これまでもたびたび日本を襲っています。一歩間違えば国を失ってしまうピンチに遭遇しながら、日本人はこれらを見事に乗り越えてきました。しかも、試練の度により逞しく成長しました。その根底にあるのは、境遇を受け入れつつ「おかげさま」「for you」の精神で前進しようとする力なのではないでしょうか。

いいことも悪いことも、喜びも悲しみも、すべてを温かく包み込んで前進する日本人の大らかさ、優しさ、強さを知った時、日本人は真に勇気を持って自分の足で立つことができるし、自分自身への誇りを取り戻すことができるのではないかと思います。